

氏名（本籍）	マツモト リョウスケ 松本 凌介（福岡県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 151 号
学位授与年月日	2023 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	絵画における写実表現の特性とその意義について -日本のスペインリアリズムの受容と比較を通して-
論文審査委員	主査 准教授 石黒 賢一郎 委員 教授 森永 昌司 委員 准教授 石松 紀子 委員 准教授 石谷 治寛

論文内容の要旨

現代のアートシーンでは日々新しい表現方法が生まれており、多様な表現をみることができるが、絵画の中には写実表現を用いた作品が存在している。それはリアリズムとも呼ばれ、美術史の中ではスーパーリアリズム、社会主義リアリズムなどの言葉として聞くことも多い。19世紀の写真の登場により、絵画の死という言葉があるように、見えるがまま描く写実は古い表現と言われてきたが、現代アートが台頭する中でも写実表現をとり入れた絵画は世界各地でみることができる。

近年日本のアートシーンではその写実表現を用いた絵画、いわゆる写実絵画に注目が集まっている。展覧会や雑誌での特集、写実絵画を専門とした美術館の登場もあり、その注目度はここ近年続いている。しかし、メディア等で注目されるのは技術的な側面が多く、描かれている内容や絵画上での視点が欠けていると感じている。

写実絵画は 1970 年代からこれまで少しずつ、野田弘志や森本草介などの活躍により、絵画における重要な表現の一つとして何度も注目を集めてきた。2000 年代までは美術誌上でも議論も行われてきたが、現在は作品が先行し、写実表現とは何かといった議論が減少しているように感じている。その影響か、表面的なものや市場を意識した画一的な作品が見受けられる。このような現在の状況の中、自身も写実表現を用いて絵画作品を制作する者として、今一度、絵画における写実表現の特性とその意義を本論文と制作をもって明らかにしたい。

写実表現を研究対象とする上で、日本だけに限定すると本来の写実表現の特性と意義を明らかにするのは限りがあると感じ、スペインの絵画を同時に研究対象とすることにした。

スペインの写実表現を用いた絵画（スペインリアリズム）は世界的にも評価を受けており、中でもアントニオ・ロペス・ガルシアは日本の画家たちにも大きな影響を与えている。スペインの写実表現は日本と同様 1970 年代以降に注目を集めるようになった。日本でも展覧会が複数回行われており、その都度両国の作品を交え写実表現とは何かを考えられてきた。そのため、現在の視点から写実表現を研究する上で適切だと判断し、日本とスペインの絵画を研究対象と

した。

また、本論文では、先行研究や参考文献が少ないため、資料として現在活躍している作家たちにインタビューを行った。どの作家も自身の作品と写実表現に対する考えが深く、本論文においてとても重要な資料となった。

本論文では、現在の視点から絵画における写実表現の特性と意義を歴史、対象、色彩、制作課程、自身の制作の視点から考察していく。歴史は主に近代からこれまでの流れの中で、写実表現の特性を考えていく。対象は画家の具体的な作品を取り上げ、画家が何を写実表現で何を表現しようとしたのかを考察していく。色彩は主にモノクロームの作品を中心に写実とモノクロームの関係性の中にある絵画的性と親和性を取り上げた。制作過程からは画家が写実表現を用いた作品を制作する過程に焦点をあて、描くという中にある時間と現実についてふれた。自身の制作ではこれまでの研究から得たものをもとに制作した作品を取り上げ、自身にとっての写実表現とは何かを述べた。

本論文を通して、絵画における写実表現にはそれぞれの画家がみる個別の主観的な世界がみえ、それは描かれた対象、作者そして鑑賞者の存在を認識させる特性があることを明らかにした。また、絵画において写実表現はわたしたちを構成する時間や空間、存在を、五感を通してとらえなおすことができ、私たち自身を見失わないようにする特性があるといえる。

そのため、絵画にとっての写実表現はなくてはならないものであり、何度も考えなければならないものだといえる。

論文審査の結果の要旨

本研究は『絵画における写実表現の特性と意義について』-日本のスペインリアリズムの受容と比較を通して-と題するものである。申請者はこれまで日本とスペインの写実絵画と、その表現を比較しながら研究を続けてきた。論文において第1章では、日本とスペイン双方の写実絵画の歴史や風土に焦点を当て考察している。第2章では、第1章で述べた内容について、人物画、静物画、風景画等から写実表現の特性を検証している。第3章では、モノクロームと写実表現の関係性を取り上げている。モノクロームで描くことは抽象性を帯びる側面もあるが、対象への凝視効果に繋がっていると考察されている。第4章では、具体的な作家を取り上げ制作過程に注目している。写実表現が生きていることと変化を受け入れることで成り立つものだと述べている。第5章では、申請者自身の作品を取り上げ、時代や社会に目を向けている自身の写実表現の考えを論述している。また、申請者の作品『美しすぎる世界』は、豊かさとは何かをテーマに描いており、写実表現を基に自己と他者、視覚と存在とは何かを考え、申請者自身の概念や複雑な表象を表現することに挑戦していることが評価できる。論文執筆においては、日本の写実表現を牽引する6名の画家とスペインの画家にインタビューを行い意欲的に研究していることも評価できる。以上のことから博士学位本審査として評価に値すると判断し、合格とした。